

『葉っぱの行方』
なか

四月二日(金) 早朝

「はっちゃん荷物それだけ？ 少なすぎじゃない!？」

「ちよつと行つて来るだけなんだから充分でしょ」

返事をしながら靴を履き終える。

「まあね。でも気を付けて行つてきなよ。はっちゃん世間知らずの上に天然だし」

「そんなことないってば」

「じゃあ新幹線の切符誰が買ってきたんだっけ？」

「そりゃあえっちゃんには感謝してるけどさ……」

思わず口を尖らせながら立ち上がり、悦子の方へ振り向く。

「じゃあ行つてくるね」

「行つてらっしゃい。たまにつぶやくの忘れないでよ。一応心配してるんだから」

「はいはい」

そんなやり取りをしながら玄関を開け外に出た。

四月といえど新潟はまだ桜も咲いてないし朝は肌寒い。ストールを巻きなおしながら駅までの道を歩く。

不安と、期待が入り混じった何ともいえない感じた。だけど気持ちが高ぶっているのは自分でも分かる。

今日私は人生で初めて家出をする。

三月三十日(火) 夜

「桜餅の葉は食べられないかあ。あたしはそんなの関係ないけど」

不意に聞こえてきたその声に危うく好物のマシユマロを喉に詰まらせそうになった。

懐かしいけどほろ苦い、けれど一生忘れる事の出来ない言葉。何故その言葉を知っているのだろうか。

「えっちゃん何一人で言ってるの？」

マシユマロを麦茶で流し込み、背中を向けながら何かをしている悦子に動揺を悟られない様聞いてみる。

「違うよ配信聞いているの」

「配信って何？」

「えつとね……でもはっちゃんに分かるかなあ？」

「聞けば分かる ツイッターだつて聞いたら出来る様になつたでしょ!？」

「でた。はっちゃんの負けず嫌い。ツイッターだつてまだ『おやつなう』位しかつぶやけてないじゃん」

悔しいけどその通りだ。何も言い返せないでむくれている私を見て、ケラケラと笑いながら悦子は配信について教えてくれた。良く分からないがパソコンで聞けるラジオのようなもので、その配信している人とも色々やり取りが出来ると嬉しい。

「今まであたしがパソコンの方向いてる時は全然興味なさそうだったのに。いきなりどうしたの？」

「さつきえっちゃんが言つてた独り言がちよつと気になつて。何それ？」

あくまでその言葉を今始めて聞いた事の様に尋ねてみる。既に知っていると言つたら何故知つているか答えるまで悦子はしつこくしぶとく聞いてくるからだ。

「今配信してる人が桜餅の葉は食べ物じゃないって言つてたんだもん。てかお父さんが呼んでない？ はっちゃん行こっ」

とさらに詳しく聞こうと口を開きかけた私を置いて悦子はスタスタとテーブルの方へ行つて

しまった。

「実はじつちゃんを、老人ホームに預けてみる事にしたんだ」

「は!？」

悦子と私が同時に聞き返す。

「何で？ いつから？」

「とりあえず明後日から一日。ほら、じつちゃん少し、その呆けてきたらう？ 病院で検査し

て詳しく話を聞いてきたんだけど、初期のアルツハイマー病らしいんだ」

その言葉に思わず息を飲む。アルツハイマー病は治らないとどこかで聞いたことがあるからだ。突然の話に頭が付いていけず黙り込む。悦子も同じようだった。そんな私達を見ながらさらに話は進む。

「薬を飲めば少しは進行が遅くなるらしいんだけどな。最終的には寝たきりになる事が多いそうだ。そうなったら大変だろう？ 俺も母さんも昼間は働いてるし。二人の負担もこれからどんどん増えていくだろうから、じつちゃんには少しずつ老人ホームに慣れていってもらっていいずれは……」

「老人ホームに入れるって事!？」

何を考えているんだろう？ 他の選択肢もある筈じゃないのか。

「そういうことも含めて考えてみようと思つて今回一日お願いすることにしたんだ」

「何で私たちに聞かないで勝手に話を進めるの!？」

「話したら二人は反対すると思つてたからさ。母さんと凄く悩んだんだがある程度決めてから話すことにしたんだ。すまない」

確かに最近通院する回数が増えたと思つてた。全てはこの為だったのか。

怒りで頭が良く回らない中、自分でも驚く位大きな声で

「私は嫌」

と叫んでいた。

「そんなすぐ話を進めなくもよくない？」

と私に同調する様に悦子も言う。

「だけどな……」

言い終わらないうちに私はテーブルから立ち上がった。

「二人で勝手に決めるなんて酷すぎる もういいっ」

「はっちゃん」

悦子の声も無視して私はその場から去った。逃げたと言つても良いかもしれない。とにかくそれ以上話を聞いていたくなかった。

「おや、えっちゃん」

部屋に戻ろうと思いい廊下を歩いてみると、明後日自分がどうなるかなんて知るはずも無い、そして決める事すら出来ない張本人がトイレから出てきた。

「私ははっちゃんだつてば」

そう返事をすると

「そうかい。じゃあえっちゃん、はっちゃんを見かけたら早く寝るように言っておいておくれ」と私の頭を優しく撫でた後部屋の方へ戻つていった。

頭を撫でられるのは嫌いじゃないし、いつもの事だ。なのに今日は撫でてくれた手の温もりに涙が出そうになった。

こんな気持ちで部屋にいたつて余計辛いだけだ。私は向きを変え、悦子の部屋へ向かった。ある決意を胸に秘めて。